

# Reinhart and Reuland (1993)における 前置詞 about の目的語となる 再帰代名詞の扱いについて

濱 寄 通 世

次の (1a-b) の容認可能性の違いは、再帰代名詞の分布を説明する上で、しばしば問題となるものである。例えば Chomsky (1981) の束縛原理Aは、再帰代名詞など照応表現は先行詞にc-統御されると予測するが、(1a) と (1b) のいずれにおいても、再帰代名詞は先行詞によってc-統御されない。先行詞を最初に支配する枝分かれ節点PPが、再帰代名詞を支配しないからである。したがって束縛原理Aは、(1b)のみならず(1a)をも排除してしまう。

- (1) a. We talked [<sub>PP</sub>with Lucie<sub>1</sub>] about herself<sub>1</sub>.  
b. \*We talked [<sub>PP</sub>about Lucie<sub>1</sub>] with herself<sub>1</sub>.

(Reinhart and Reuland (1993, p.715), 標示付括弧は引用者)

しかし Reinhart and Reuland (1993) の枠組みでは、(1a-b) の違いは、再帰代名詞の分布についての一般的な条件によって、説明されることになる。本稿では、Reinhart and Reuland による (1a-b) の説明を検討する。Reinhart and Reuland の説明は、(1a-b) において、about の目的語の再帰代名詞が、動詞の項ではないという仮定に基づくものであるが、以下では主に、この仮定の問題点を考えていく。Reinhart and Reuland の枠組みによって、(1a-b) の対照を一般的な形で説明できないとすれば、この対照は、

何か他の仕組みによって説明されるべき問題である、ということになる。

1. Reinhart and Reuland によれば、英語の再帰代名詞は、局所的に束縛される再帰用法と、局所的に束縛されない発話照応形 (logophor) とに分類され、再帰代名詞が述語の項であるときそれは前者であり、述語の項でないとき後者である。Reinhart and Reuland は、次のような条件を仮定する。<sup>1</sup>

(2) 条件 A

再帰的であると標示された述語は、再帰的である。

「再帰的」及び「再帰的であると標示される」は、次のように定義される。

- (3) a 述語は、その項のうち2つが同一指標を持つとき、再帰的である。  
b (Pによって形成される) 述語が、再帰的であると標示されるのは、Pの項のうち一つがSELF照応形 [英語の再帰代名詞のように、-self(ves)の形をとる再帰代名詞] の場合である。

以下では、述語が動詞である場合を考える。(3b)から、動詞の項である再帰代名詞は、その動詞を再帰的であると標示する。この場合動詞は、(2)の条件により再帰的でなくてはならない。すると(3a)により、動詞は再帰代名詞と同一指標を持つ別の項を、持たなければならない。したがって再帰代名詞は局所的に束縛されることになり、再帰用法である。逆に、動詞の項でない再帰代名詞は、その動詞を再帰的であると標示しない。そうすると、動詞には(2)の条件が適用されない。この場合、動詞が再帰代名詞と同一指標を持つ項を、持つと持たないとにかかわらず、(2)の条件は文を排除しない。したがって再帰代名詞は局所的に束縛されることを要求されず、発話照応形となりうる。

ある要素が動詞の項であるかどうかを決定する際、それが動詞に後続す

る前置詞の目的語であるとき、注意が必要である。Reinhart and Reuland は、前置詞の目的語が前置詞自体の項であって、動詞の項でない場合と、前置詞の項ではなく動詞の項である場合とを区別している。典型的には、前者の場合、場所や方向を表す前置詞であり、後者の場合、そのような意味の薄れた、動詞ごとに指定される前置詞である。<sup>2</sup>

Reinhart and Reulandは、再帰代名詞は、どちらのタイプの前置詞の目的語であるかによって、異なる性質を示すことを観察する。まず、前者のタイプの前置詞の目的語である場合、したがって再帰代名詞が前置詞自体の項であり、動詞の項ではないとき、(4)に示すように、先行詞が文中にない一人称の再帰代名詞となりうるが、後者のタイプの前置詞の目的語である場合、したがって再帰代名詞が前置詞自体の項ではなく、動詞の項であるとき、(5)に示すように、そのような再帰代名詞にはならない。

(4) There were five tourists in the room apart from myself.

(5) \*Five tourists talked to myself in the room.

(Reinhart and Reuland, p.669)

(4)では、再帰代名詞は動詞の項ではない。そうすると(3b)から、動詞は再帰的であると標示されないので、(2)の条件が適用されない。<sup>3</sup>したがって、この文を排除する条件が特に存在しないので、(4)は文法的となる。逆に(5)においては、再帰代名詞は動詞の項なので、(3b)により、動詞を再帰的であると標示する。そうすると(2)の条件により、動詞は再帰的でなければならない。しかし、動詞は再帰代名詞と同一指標を持つ項を、持たないので、(3a)により再帰的ではない。したがって(2)の条件に違反し、(5)は排除される。

次に、(6)に示すように、再帰代名詞が前置詞自体の項であり、動詞の項ではない場合、代名詞と交替可能であるが、(7)に示すように、再帰代名詞が前置詞自体の項ではなく動詞の項である場合、そうではない。

(6) a. Max<sub>1</sub> saw a gun near himself<sub>1</sub>/him<sub>1</sub>.

b. Lucie<sub>1</sub> counted five tourists in the room apart from herself<sub>1</sub>/her<sub>1</sub>.

(7) Max<sub>1</sub> speaks with himself<sub>1</sub>/\*him<sub>1</sub>.

(Reinhart and Reuland, p.661、指標は引用者)

このような再帰代名詞と代名詞との交替は、次の条件によって説明されている。

(8) 条件B

再帰的な述語は、再帰的であると標示される。

(6a-b)では、再帰代名詞および代名詞が、動詞の項ではない。すると、(3a)により動詞は再帰的ではないので、(8)の条件が適用されない。したがって動詞は再帰的であると標示される必要がなく、再帰代名詞だけではなく代名詞も許される。逆に(7)では、再帰代名詞および代名詞が動詞の項である。そうすると、(3a)により動詞は再帰的なので、(8)の条件が適用される。したがって動詞は再帰的であると標示されなければならない、再帰代名詞のみが生じ、代名詞は許されない。

2. Reinhart and Reuland は、前節でみてきたような、述語の項である再帰代名詞とそうではない再帰代名詞との違いという観点から、(1a-b)の対照を説明しようとする。(1a-b)を、(9)としてもう一度示す。

(9) (=1) a. We talked with Lucie<sub>1</sub> about herself<sub>1</sub>.

b. \*We talked about Lucie<sub>1</sub> with herself<sub>1</sub>.

Reinhart and Reuland は、withPP 中の再帰代名詞は動詞の項であるが、aboutPP は動詞の付加部であり、その中の再帰代名詞は動詞の項ではないとする。そうすると (9a)と(9b)の違いは次のように説明される。(9a)において再帰代名詞は動詞の項ではない。すると動詞は、(3b)により再帰的であると標示されず、(2)の条件が適用されない。したがって、この文

を排除する条件が特に存在しないので、(9a)は文法的となる。しかし(9b)において再帰代名詞は動詞の項である。したがって動詞は、(3b)により再帰的であると標示されるので、(2)の条件が適用される。そうすると動詞は、再帰代名詞と同一指標を持つ別の項を、持たなければならないが、そのような項が存在しない。先ほど述べたように、aboutの目的語のLucieは動詞の項ではない。したがって(9b)は(2)の条件に抵触し、排除される。

しかし、aboutPPを動詞の付加部とすることは妥当だろうか。Reinhart and Reulandは、aboutPPが動詞の付加部であり、aboutの目的語は動詞の項でないと仮定する理由として、aboutの目的語の再帰代名詞の、次のような性質をあげる。まず、(10)に示すように、再帰代名詞の代わりに、この位置に代名詞が現れることがある。また(11a-b)に示すように、一人称の再帰代名詞が同一文中に先行詞を持たないとき、それがwithの目的語である場合よりも、aboutの目的語である場合の方が、容認可能性が高い(Reinhart and Reuland, p.715)。

(10) We talked with Lucie<sub>1</sub> about her<sub>1</sub>.

(11) a. \*Can you talk with myself about Lucie?

b. Can you talk with Lucie about myself?

(Reinhart and Reuland, p.715)

まず(10)では、aboutの目的語の代名詞は動詞の項ではないので、(3a)により動詞は再帰的ではなく、(8)の条件の適用を受けない。したがって動詞は、再帰的であると標示される必要がなく、(10)は文法的である。次に(11a)では、再帰代名詞は動詞の項なので、(3b)により動詞を再帰的であると標示する。したがって(2)の条件が適用され、動詞は再帰代名詞と同一指標を持つ、別の項を持たなくてはならない。しかしそのような項がないので、(11a)は非文法的である。逆に(11b)では、再帰代名詞が動詞の項でないので、(3b)により動詞を再帰的であると標示しない。したが

って(2)の条件が適用されず、(11b)は文法的である。

これらの性質は、前節で述べた場所や方向を表す前置詞の目的語の再帰代名詞に、観察されるものであり、about はこうした前置詞と、同じ性質を持つということになる。しかし、(10)の例については、判断に揺れがみられるようである。Baltin and Postal (1996, p.133)は、(10)の例文に対する Reinhart and Reuland の判断に異を唱えている。したがって、これらの例だけに基づいて、about の目的語の再帰代名詞を、動詞の項でないと判断できるかどうか、疑問が残る。<sup>4</sup>

また、従来 withPP と aboutPP は、どちらも動詞に対して、いわば同等の資格を持つとされてきたと思われる。その理由としては、次のようなものがあげられる。まず、動詞に前置詞句の項が後続する場合、aboutPP はそれに先行することがある。したがって、(12a-b)および (13a-b)が示すように、この二つの前置詞句の語順は自由である。

- (12) a. We spoke to Bill *about John*.  
b. We spoke *about John* to Bill.
- (13) a. I talked *about the problem* to my doctor.  
b. I talked to my doctor *about the problem*.

(Radford (1988, p.352)、斜字体は引用者)

しかし、(14)-(16)にみるように、動詞の付加部である PP は、動詞の項の PP に先行しないのが普通である (Radford (1988, p.235)、例文中の斜字体は引用者)。

- (14) a. He worked at the job *at the office*.  
b. \*He worked *at the office* at the job.

(Radford (1988, p.235))

- (15) a. He laughed at the clown *at ten o'clock*.  
b. \*He laughed *at ten o'clock* at the clown.

(Radford(1988, p.235))

- (16) a. John abided by my wishes *through fear*.  
b. \*John abided *through fear* by my wishes.

(Radford(1988, p.348))

したがって、これらの例から判断する限り、aboutPP は動詞の付加部ではないということになる。次に以下の例を考える。

- (17) a. \*John *talked to Bill* about Harry, but he didn't *do so* about Fred.  
b. \*John *talked about Harry* to Bill, but he didn't *do so* to Fred.  
c. John *talked to Bill about Harry* on Sunday, but he didn't *do so* on Thursday.

(Jackendoff (1977, p.65)、斜字体は引用者)

(17c)において do so は、talk to Bill about Harry に対応しているが、(17a-b)では、talk to Billとtalk about Harryにそれぞれ対応している。do soは、動詞とそれを厳密下位範疇化する要素から成る構成素に対応するとすれば、(17c)だけが容認可能であることから、toPP と aboutPP はどちらも、talk を厳密下位範疇化することになる (Jackendoff (1977, p.65))。動詞を厳密下位範疇化する要素は動詞の項であるとすれば (同上, p.57)、aboutPP は動詞の付加部ではない。

そうすると、aboutPP は動詞の項であるか、あるいは about の目的語が動詞の項である。前者の場合、aboutPP が動詞の付加部であるときと同じように、about の目的語は前置詞の項であって、動詞の項ではない可能性がある。<sup>5</sup> Hestvik (1991, pp.479-82)は、前置詞の目的語が前置詞自体の項であって、動詞の項でない場合と、それが動詞の項である場合とを区別する、いくつかの基準を示している。それらのうちのいくつかを、考えてみる。まず、前置詞の目的語が動詞の項でない場合には、(18)に示すように、受動文の主語になれないが、前置詞の目的語が動詞の項である場合に

は、(19)に示すようにそれが可能である。

- (18) a. \*John was sat near.  
b. \*Bill was looked over.  
c. \*The table was searched behind.
- (19) a. John was relied on.  
b. John was looked at.  
c. John was talked about.

(Hestvik, p.480)

(19c)から、aboutの目的語は動詞の項である。また(20)に示すように、前置詞の目的語が動詞の項でないときには、その前置詞句を代用表現に置き換えることができるが、(21)に示すように前置詞の目的語が動詞の項の場合、それが不可能である。

- (20) a. Irving put the books [on the shelf]/there/away  
b. Sheila put the clothes [in the closet]/inside/on  
c. John threw the ball [to Bill]/there/away
- (21) a. John relied [on Bill]/\*there/\*away  
b. John gave it [to Bill]/\*there

(Hestvik, p.481)

I talked (P NP) about NPのような文で、about NPに代わる代用表現がないとすれば、aboutの目的語は動詞の項である。また(22)に示すように、前置詞の目的語が動詞の項でない場合、その前置詞句をwh句によって置き換えることができるが、(23)に示すように前置詞の目的語が動詞の項である場合には、それが不可能である。

- (22) a. Where did he put it t  
b. Where did he look t



- (23) a. \*Who did he speak  
b. \*Who did he talk

(Hestvik, p.481)

(23a-b)の who を aboutPP として解釈することができず、また who の他に適当な wh 句で aboutPP を置き換えられないとすれば、about の目的語は動詞の項である。以上の理由によって、about の目的語は動詞の項であるということになる。

このように、aboutの目的語が動詞の項であるなら、(9a-b)のいずれにおいても、再帰代名詞は動詞を、(3b)により、再帰的であると標示する。すると、いずれの文の動詞にも、(2)の条件が適用される。どちらの動詞も、再帰代名詞と同一指示的な別の項を持つので、(3a)により再帰的であり、(2)の条件を満たす。したがって(9a-b)は、両方とも文法的である、ということになってしまう。

3. 以上、(1a-b)の対照についての、Reinhart and Reuland の説明を検討した。この対照を説明することは、Reinhart and Reuland の論文の主眼点では決してない。彼らの論文では、一節の冒頭で触れたように、いわゆる再帰用法と、発話照応形との間の線引きの問題について、一つの解答が示されている。つまり、再帰代名詞は述語の項のとき、条件Aによって同じ述語の別の項と同一指示的である。この場合の再帰代名詞は再帰用法である。しかしそれが述語の項でないとき、条件Aが適用されず、発話照応形となりうる、ということである。(1a-b)の対照についての本稿の議論は、この解答に対しての直接の批判とはならない。しかし、少なくとも、(1a-b)の対照をこの線引きの延長で説明することには、本稿で述べたような問題がある。Reinhart and Reuland によれば、about の目的語の再帰代名詞は動詞の項ではないので、発話照応形となりうる。しかし、about の目的語の再帰代名詞は動詞の項であるとするれば、(1a-b)の対照は、何か他の仕

組みによって説明されるべきであるということになる。<sup>6</sup>

## 注

1. 正確には、彼らの提案する原理は次のようなものである。

(i) 条件A

再帰的であると表示された統語的述語は、再帰的である。

「統語的述語」は次のように定義される。

(ii) (主要部) Pによって形成される統語的述語は、Pと、その全ての統語項と、Pの外項(主語)である。Pの統語項は、Pによって $\theta$ 役割か格を付与される投射である。

2. この区別について、Reinhart and Reuland は、次のように述べている。前置詞の目的語が前置詞自体の項であって、動詞の項でない場合、前置詞句が、(i)のように付加部である場合と、(ii)のように動詞の項である場合とがある。

(i) Max<sub>1</sub> saw a gun near him<sub>1</sub>.

(ii) Max<sub>1</sub> put the gun near/under/on him<sub>1</sub>.

(Reinhart and Reuland, p.664)

(ii)では、動詞は場所の意味を持つ項を選択する。したがって前置詞の目的語ではなく、前置詞句全体を項とする。この場合、場所の意味を表す前置詞であれば、どのような前置詞でもよい。逆に、前置詞の目的語が動詞の項である場合、(iii)に見るように、動詞ごとに一つの前置詞が指定される。

(iii) a. \*Max<sub>1</sub> speaks with him<sub>1</sub>.

b. \*Max<sub>1</sub> relies on him<sub>1</sub>.

(同上)

(i),(ii)と、(iii)の文法性の対照については、本文中で述べる。

3. この場合再帰代名詞は前置詞自体の項なので、それを再帰的であると標示する。しかし前置詞は一般に外項を持たないとすると (Reinhart and Reuland, p.681)、注1(ii)により前置詞は統語的述語を形成しない。ところが同注の(i)は、統語的述語に適用される条件である。したがってこの条件は、前置詞によって形成される述語には適用されない。

4. (11)の例については、他の資料を見つけていないこと、また独自の調査をしていないことを、認めなければならない。

5. 注2を参照。

6. Chomsky (1981)の束縛原理Aにとっても、この対照は依然残された問題である。本稿の冒頭で述べたように、束縛原理Aは、(1b)のみならず(1a)をも排除してし

まう。この問題を回避するために、(1a)について次のような「再分析」された構造を仮定することが考えられる(Chomsky (1981, chapter 3, note 37) を参照)。

(i) We [<sub>v</sub>talked with] Lucie<sub>1</sub> about herself<sub>1</sub>.

(i)において、talked と with が1つの動詞として再分析されるとすれば、Lucie が herself を c- 統御する。したがってこの文は束縛原理Aを満たすことになる。同じような操作によって(1b)の talked と about が一つの動詞になるとすれば、先行詞は再帰代名詞を c- 統御するので、(1b) が誤って文法的であるとされる。よく知られているように、(1b) の非文法性は語順によるものではない。aboutPP は、以下の例に見るように、動詞の直後の位置にも生じる。

(ii) a. (=12b) We spoke about John to Bill.

b. (=13a) I talked about the problem to my doctor.

したがって、(1b) の例を説明するためには、再分析が(1b) に適用されないと仮定せざるをえないが、なぜそうなのか、はっきりしない。この点について Chomsky (1981, chapter 3, note 37) に若干の議論があるが、はっきりとした結論は出していない。また、再分析という操作自体、Baltin and Postal (1996) によれば検討が必要である。したがって、Chomsky の束縛理論によっても、その枠組み自体の是非は別として、(1a-b) の対照に、満足のいく説明が与えられていない。

## 参考文献

- Baltin, Mark and Paul M. Postal (1996) "More on Reanalysis Hypothesis." *Linguistic Inquiry* 27, 127-145.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Hestvik, Arild (1991) "Subjectless Binding Domains." *Natural Language and Linguistic Theory* 9, 455-497.
- Jackendoff, Ray (1977) *X' Syntax: A Study of Phrase Structure*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Radford, Andrew (1988) *Transformational Grammar: A First Course*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Reinhart, Tanya and Eric Reuland (1993) "Reflexivity." *Linguistic Inquiry* 24, 657-720.